

## アソカ講話093

テーマ「人生に何一つ無駄なものはない ⑤」

「幸せのありか」の中に「美しいもの」というテーマで次の一節がある。「薬の効用、人手の効用は、必ずしも病がいやされることだけではない。一人の人間が、その最も大切な瞬間、死を迎える時に、「愛された」と感じ、一人格として尊厳を取り戻すのに役立った薬、人手ほど、尊い使われ方はないでしょう。産み捨てた母を許し、冷たかった世間への恨みを忘れ『神も仏もあるものか』と思っていた神仏への帰依を取り戻し、感謝の心でこの世を去ることができるために使われた薬と人手は『美しいもの』を生み出したのです」と。

人は死を迎える時に誰に側にいてほしいだろうか。一番大切な人、愛する人と答える人が多いだろう。私達の仕事は、ご利用者の死を看取る仕事でもある。最もそばにいてほしい大切な人として私達介護職はご利用者のそばにいることになる。

介護は人格の専門職といわれるゆえんである。ご利用者の人生の最後の時に、その人の尊厳を守り輝かせて送る立場にあるからだ。私達に見送られているご利用者の顔が美しく輝く、その中で私達は自然な死の意味を教えられる。人生に無駄なものは何一つない。ご利用者の穏やかな死が、私達に生きる意味を与えてくれるのだ。